告発する dramatic monologue

バレット・ブラウニングと子供を葬る逃亡奴隷

浜本裕美

Elizabeth Barrett Browning (これ以降 EBB と略す) は、'The Runaway Slave at Pilgrim's Point' を 1846 年に執筆、1848 年版 *The Liberty Bell* (1847 発行) に掲載した。奴隷所有者のもとから逃亡した語り手は、アメリカの自由の象徴であるピルグリム・ファーザーズが上陸した地点に立ち、白人からの陵辱の結果生まれた息子を殺して、土に埋めた様子を語る。詩の最後には、彼女を捕まえにきた白人たちに囲まれ、恐らく死んでいくことが示唆される。この詩は、奴隷制廃止を訴える詩の系譜や大西洋を跨ぐ奴隷の語りの系譜に加え、1830 年代以降興隆した革新的な詩のジャンルである dramatic monologue（劇的独白）の系譜に連なる。本発表では、ジャンルの選択がこの詩にもたらした効果を考察した上で、詩人と語り手の距離について触れた。

イギリスでは、奴隷解放の決定 (1833 年) までに多くの反奴隷制運動がなされた。本発表は、Hannah More が（Eaglesfield Smith との共作で）*Cheap Repository Tracts* に発表した'The Sorrows of Yamba' (1795) というバラッドを取り上げた。当時最もよく知られた詩の一つであり、キリスト教の教えに反して非人道的な奴隷制を続けるイギリスを糾弾する。語り手の黒人女性ヤンバは、奴隷にされた地でキリスト教を知り、神との出会いを可能にしたことを理由に自分が奴隷になったことを祝福する(125-6)。More の詩では、黒人女性の一人称はキリスト教の伝道を大義名分とする白人の視点に寄り添っており、この詩は他者の一人称を収奪したとも言える。'The Runaway Slave at Pilgrim's Point'もまた、EBB 自身 'an antislavery ballad'と呼んだバラッド形式の作品である（*Letters to Mary Russell Mitford* Feb. 8- [1847]）。

More の詩とは対照的に、EBB の詩においてキリスト教は大きな問題となる。詩の冒頭、語り手は、イギリスの宗教的迫害を逃れた白人のピルグリム・ファーザーズが上陸した地点に立つ。彼らはアメリカの自由と宗教的基盤を象徴する。このように詩の冒頭から、白人と黒人の対比が神との関係性を主題として提示される。キリスト教は白人と結びつけられ、黒人の語り手の苦難にむしろ加担する。その結びつきを象徴するのが、第 2 連で登場する白人のピルグリム・ファーザーズの亡霊である。

こうしたキリスト教と奴隷制の関係を問う神義論は、*The Liberty Bell* に掲載された作品によく見られた。EBB は、*The Liberty Bell* の 1844 年版と 1845 年版を受け取っている。また EBB の手稿からは、1845 年に発表され再販を重ねた Frederick Douglass の自伝から影響を受けた可能性が窺える（Stone 138-40）。Douglass は *The Liberty Bell* の主要な執筆者であり、1846 年にはロンドンをツアーで訪れた。EBB の手稿によれば、当初語り手は男性の逃亡奴隷であった。EBB の手稿の冒頭は、神の被造物が奴隷であることへの葛藤で始まる。Douglass は自伝の第 10 章で 'Is there any God? Why am I a slave?'と問いかけ、南部のキリスト教を非難した。EBB の語り手は、奴隷制を是認するキリスト教に対する葛藤を、*The Liberty Bell* や Douglass から受け継いでいる。

他方で EBB の詩は、ヴィクトリア朝に誕生した革新的な死のジャンルである劇的独白の系譜にも連なる。奴隷制が廃止された 1834 年には Great Reform が行われた。大英帝国は、内部で大きな変動を迎え、外部では奴隷制を廃し、さらなる拡張に向かう。同時期に、他者の声を語る新たな表現形式が模索され、後に劇的独白と呼ばれるジャンルが誕生するのは偶然ではないだろう。

劇的独白は 1830 年代から執筆され、熱狂的宗教者や殺人者など規範から外れ異常な心理状態にある人物が自己の肥大化した主観性を言葉によって明かすことがジャンルの慣習となる（Pearsall 73）。EBB の詩の語り手には、白人男性層に対し幾重にも他者性が折り重ねられている。読者は、黒人であり、女性であり、殺人者である語り手が、言葉を通じて主観性・主体性を構築する過程を目撃することになる。この詩の評価には大きな幅があるが、語り手の主体性の獲得が主要な関心とされてきた。Brophy は、この詩は女性の声をメロドラマ化して、家父長的な枠組みに組み込む保守的な詩であると批判し、黒人女性の語り手の主体性が制限されていると論じる（277, 281）。対照的に、Cooper は、子殺しを悲劇的行為と評価するし（119）、Parry は、子殺しは語り手にとって自分の運命を支配するに至った変容の時点と理解する（124-5）。また Slinn は、黒人という否定的なラベルを自ら引き受け、子を殺すことで、語り手は主体性を勝ち取ったと評価する (96)。

確かに、この詩において、語り手は白人の顔を持つ子供を殺すことを選択し、その行為は自分が黒人であるという自己認識に密接に結びつく（cf. 第 32 連'I am not mad: I am black'）。しかしながら、黒人女性の主体性の獲得が語られているとしても、Parry や Slinn が述べるように、子殺しが英雄的で勝ち誇るべき行為として語られているとは考えにくい。こうした見解に対し Brown は、人種差別という政治的・言説的システムが、（当

時の通念では）生物学的絆である母子関係を切り裂き、語り手の主体（the subject）を二つに分裂させていると論じる（129）。子供を殺す母親が、黒人の主観性を構築する言葉は、（主に）白人男性の構築する人種差別のシステムから逃れられていない。白人の顔を持つ子は、語り手にとって、自分から生まれた子でありながら、抑圧者の側にも属している。自分の子が白人であることが、語り手の主体性・主観性を危うくするのである。

劇的独白は、語り手が自らの視点に依拠し、言葉を通じて現実を構築する様子を明らかにする。この形式を取ることで、自らの意志で行為を選び取るという主体性の存立の不確かさ、主体的選択や意志に基づくと見なされうる行為を全面的に肯定することの危うさが透けて見える。語り手の言葉を通じて明かされる子殺しに至る自己認識と現実把握それ自体が、奴隷制を支える世界認識と暴力性に依拠している。子殺しはそこから逃れる術を持たない閉塞感と絶望を表現するものだろう。この詩は、語り手が子殺しに至る主観性の構築が、奴隷制という客観的なシステムの異常性・暴力性に絡めとられていることを、語り手の言葉によって明らかにする。この詩は、逸脱と他者性を主題とする劇的独白の慣習を逆手に取って、こうした異常な事態に人間を追い込む人種差別の制度を告発するのである。

最後に、詩人とこの詩の語り手の関係に触れた。EBB は、執筆時に妊娠中であり、女性として語り手に重なる側面を持つ。この詩を完成させた 1846 年は、詩人が、秘密裏に結婚、イタリアに移住した時期に重なり、語り手の自由への希求の裏に、詩人自身が、父親の支配を脱したことの反映を見る研究者が多い（Cooper, Parry, Brown etc.）。他方で、詩人は、自分の家族が代々ジャマイカに農園を有し、奴隷支配の収益で財を成したことに、罪の意識を感じている（‘I belong to a family of West Indian slaveholders, and if I believed in curses, I should be afraid’ (*Brownings' Correspondence* 21, 343-47)）。詩人は、語り手とも、奴隷保有者である白人支配層とも重なる。

詩人が最も具体的に思い描いたのが、ジャマイカの奴隷制であることは、マンゴーへの言及などに反映されている（第 20 連、第 22 連）。加えて母親が肌の白い息子を黒い大地に埋葬する件に影響を与えている（第 27 連）。大地と母親の結びつきは伝統的だが、ここでは、白と黒との対比において、大地が黒人女性と結びつけられている点が意味深い。語り手の女性をその土地に結びつけることで、女性支配、黒人支配、植民支配が結びつく。アメリカの奴隷制を告発しながらも、この詩には、イギリスの植民支配と過去の奴隷制の影が色濃く反映される。自分の息子を黒い土で覆う行為は、EBB にとって自分の白人性、支配者の側にいるという罪悪感を葬る身振りのようにも思われる。自分から生まれたものを葬ることは、自分の一部を他者化し、切り離す行為とも読める。

第 36 連において、黒人女性が死を前に白人に向けた呪いを解くことは、白人にとって都合が良すぎると思われるかもしれない。奴隷制に虐げられた黒人女性が我が子を殺害するエピソードは、トニ・モリスン『ビラヴド』を彷彿とさせる。だが、モリスンの小説では、殺された子が肉体をまとって母親のもとに回帰する。EBB が、黒人女性の視点に寄り添いながらも、最終的には白人を呪いから解放するのだとすれば、それは、詩人の奴隷制への関与が間接的なものであり、あくまで抽象的な罪悪感しか抱いていないことの反映であろう。

だが、そのことは、人種差別を告発したこの詩の力を損なうものではない。Douglass は詩人の墓に参るが、その大きな理由はこの詩を執筆したことにある。EBB は、Douglass の人種差別に根ざす宗教的な葛藤を受け継ぎ、劇的独白という詩のジャンルを通じて黒人女性に一人称で語らせることで、奴隷制の異常性と暴力性を告発した。この劇的独白は、人を動かし現実を変革する１つの助けとなったのである。

引用文献

Brophy, S. ‘Elizabeth Barrett Browning’s “The Runaway Slave at Pilgrim’s Point” and the Politics of Interpretation.’ *Victorian Poetry* 36 (1998): 124-38

Brown, S. ‘“Black and White Slave”: Discourses of Race and Victorian Feminism.’ *Gender and Colonialism.* Eds. T. P Foley et al. Galway: Galway UP, 1995, 124-38

Cooper, Helen. *Elizabeth Barrett Browning, Woman and Artist*. Chapel Hill 1988

Parry, Ann. ‘Sexual Exploitation and Freedom: Religion, Race, and Gender in Elizabeth Barrett Browning’s *The Runaway Slave at Pilgrim’s Point*.’ *Studies in Browning and His Circle* 16 (1988): 114-26

Pearsall, Cornelia D. J. ‘The Dramatic Monologue.’ *The Cambridge Companion to Victorian Poetry*. Ed. Joseph Bristow. Cambridge 2000, 67-88

Slinn, E. Warwick. ‘Dramatic Monologue.’ *A Companion to Victorian Poetry*. Eds. Richard Cronin et. al., Malden 2007, 80-98

Stone, Marjorie. ‘The Search for a Lost Atlantis: Feminist Paradigms, Narratives of Nation, and Genealogies of Victorian Women’s Poetry and Anti-Slavery Writing.’ *Women and Literary History.* Eds. K. Binhammer and J. Wood. (Newark, DE: University of Delaware Press, 2003). 119-51